

星野 光樹 提出 学位申請論文

『六人部是香と近代祭式』 審査要旨

論文の内容の要旨

博士學位申請論文「六人部是香と近代祭式」は、幕末維新期における国学思想と祭祀・祭式形成の関わりを検討するための一つのケース・スタディとして、国学者にして神職であった六人部是香の学問と祭式構想に焦点を充てて考察すると共に、さらにその維新以降における祭祀制度および祭式形成との関わり如何を巡って、実証的な検討を行ったものである。

第一編「六人部是香の神道思想と祭祀の実践」では、是香がいかなる問題意識のもと、復古的な祭式を構想・実践したのかという課題が検討される。従前の研究においては、是香の祠官としての立場に着目するものもあったものの、その神

職としての祭祀実践という側面からは、十分な考察が行われてこなかった。こうした従来の研究史への反省を承け、本編においては、是香が「産須那社」の理念に祈願の正統性を見出していたこと、それを神社の祭祀において具現しようとしたところに、是香の本領があったこと等の諸点が考察される。

第一章「産須那」思想に関する一考察―稲荷社祭神に関する考証をめぐって―」は、是香の稲荷社祭神観と、その「産須那」思想との関わりが検討される。申請者は、是香の著書『稲荷神社考附釈』が、伴信友・前田夏蔭等の先行学説を承け、現今のダキニに対する祈願が、その祈願成就と引き換えに子孫断絶を齎すものと主張していたことを指摘する。こうした点を踏まえ、外来呪術と神社祈願の明確な峻別の上に立って、是香の「産須那」思想の要諦が形作られるに至った事情が跡付けられる。

第二章「六人部是香の古典理解と神事について」では、是香の古典理解と神事観の関わりが考察される。本章においては、是香が『日本書紀』の記載に「産須

那社」の淵源を見出していたこと、『延喜式祝詞』『皇太神宮儀式帳』等の記載の中に、天皇朝廷と人民の守護を旨とする祭祀理念を見出していたこと等が明らかにされる。

第三章「向日社における祈願祭祀の一考察―六人部是香著『私祭要集』を中心に―」では、是香の著作『私祭要集』が組上に載せられる。本章では、是香が古典の考証に耐え得る形で私祈願の再編を行っていたこと、職業実践に関わる祈願の趣旨から、公的祭祀と私的祈願が不可分の関わりを以って構想されていたこと等の諸点が指摘される。ここにおいて、是香の祭式構想が、近代以降の祈願祭祀に繋がる諸側面を有していたことが明らかにされるのである。

第四章「幕末期における大祓と国学者―六人部是香を中心に―」では、幕末期に大祓の実践を唱道した是香の見解が検討される。本章では、是香が、祓の実践によって「仁慈」「誠忠」といった倫理徳目の実現を目指していたことが考察される。併せて、そこには幕末の社会情勢を背景とする「国学の宗教化」の諸特徴

が表れていることについても指摘される。

第五章は、是香の祭式書『神祭式』『祭奠式』を巡って、その玉串行事にかかわる見解と信仰的内実が検討される。ここでは、是香が玉串を祈願対象の神霊の宿りであり、その御稜威を象徴する「幣帛の料」として考えていたことが輪郭付けられる。ついで玉串行事が、祝詞奏上との関わりにおいて、その祭式次第の中に位置付けてゆく過程も辿られる。

第六章「幕末維新时期における祭政一致観―会沢正志斎と国学者をめぐって―」では、幕末維新时期における祭政一致論として、水戸学と国学の二つの潮流が概観される。即ち、天皇の祭祀を「忠孝」の喚起と民の帰順から説く水戸学に対して、平田派国学者の六人部是香や矢野玄道らは、神々の「産霊」と天皇守護を車の両輪として位置付けていたことが明らかにされる。併せて維新後、津和野派国学者によって祭政一致を主眼とする天皇親祭祭祀の制度的実現が進められていく過程についても言及される。

第二篇「明治期における神社祭式の形成過程」では、第一篇での幕末国学に関する考察を前提として、近代祭式制定に至る祭式次第・行事内容の形成過程が検証される

第一章「修祓に関する一考察―神社祭式制定過程を中心に―」では、近代祭式における修祓の制定過程が辿られる。まず近世における修祓の実態が検討され、朝儀において限られた神社で実施されるに過ぎなかった修祓が、維新以降、神祇官・神祇省の時期を経て、式部寮制定「神社祭式」によって、官社全体に及ぼされるに至る経緯が明らかにされる。

第二章「明治八年式部寮によって制定された「神社祭式」の行事次第」では、「神社祭式」「玉串ヲ奉リテ拝礼」条成立の過程が考察される。慶応四年三月、天神地祇誓祭において天皇親からによる玉串奉奠が実現した。これを端緒として、宮中祭祀・山陵祭祀・神社祭祀の全般において、玉串が奉られてゆくこととなった。本章では、玉串が、国家から供進される幣帛との区別の上に立って、拝礼に

際して奉奠される料として位置付けられるに至る経緯が実証的に検証される。さらにその背景には、天皇が神々に「大孝」を申べることを重視した津和野派国学者の祭祀構想があったことについても言及される。

補編「明治初年の神葬祭と神道思想」では、平田派国学者の多様な神葬祭形式成の諸相を巡って、その特色が検証される。

第一章「権田直助著『葬儀式』について」は、平田派国学者にして皇朝古医道の実践者、権田直助の『葬儀式』について検討される。これによれば、権田の葬祭式は、随所で霊魂安定を願う「神歌」が唱えられるところにその特色があった。

第二章「岩崎長世著『神葬考』の翻刻と紹介」では、同じく平田派国学者である岩崎長世の『神葬考』について検討が加えられる。産土神から賜った霊魂を冥府に送るのが神職の職掌であるとするその主張に、平田学、とりわけ六人部是香の「産須那社」の思想との関わりが見られることが指摘される

締め括りの終章では、本研究の論点と成果が総括され、併せて今後の研究課題

についても言及される。

論文審査の結果の要旨

近代祭式の原点ともいふべき明治八年三月制定「神社祭式」は、該書が「古ヲ稽へ今ヲ酌ミ其虚飾ヲ去リ其誠信ニ基キ祭祀ノ恆式ヲ擬撰」する歴史的意義を担うものであると宣言した。神祇祭祀とその祭式の純化を志向した是香の営為は、「近代祭式」形成に至る模索の一齣であったとも言えよう。本研究は、幕末期における国学者にして神職であった是香の「祭式構想」模索の実態を辿ると共に、その維新期における祭式制度形成との関りを、具に考察するものである。以下、近世・近代の祭祀研究・祭式研究史上における本研究の貢献を指摘していきたい。

まず第一は、六人部是香の祭式研究のバックグラウンドを、その神職としての思想的・社会的立場に即して明らかにしたことである。従来の研究は、是香の祠

官としての立場を一般的に指摘するにとどまり、その職掌たる神事や祭式の具体的内容・理念的背景まで立ち入って検討するものではなかった。そうした研究状況にあって、幕末期の平田派国学者にして向日社祠官であった是香を、その祠官としての内懐に穿ち入り、内在的な考察を加えたところに、本研究のユニークさの所以があると言えよう。

是香は「産須那社」信仰を主唱し、『日中神事記』や『順考神事伝』をはじめ、祭典・祭式に関する著作を精力的に執筆した。申請者も指摘する通り、おそらく幕末期において、祭祀や祭式に関する研究を行った国学者として、是香こそが屈指の存在であったことに疑いの余地はない。申請論文においては、幕末期の一神職が、平田国学を受容することによって、その職掌たる祭祀をいかに考え、祭式構想をいかに練り上げていったのか、またその上に立っていかなる社会的実践を目指したのかということが、実証的に跡付られてゆく。このようにして、国学者ならではの学問的考証に基づき、復古的な祭式形成に心血を注いだ是香の姿を明

らかにし得たことは、本研究の少なからぬ貢献として評価できよう。

第二の貢献は、そのような是香の祭式形成の営為を、近代祭式形成の前史として明確に位置付けたことである。とりわけ本論文後半では、是香ら幕末国学者の営為を承けた、維新时期以降の祭式形成の動向が詳細に辿られる。

本研究は、この課題を、「玉串行事」の位置付けと変遷を通して、具体的に辿ってゆく。申請者によれば、是香は文政期に『日中神事記』を著し、『皇太神宮儀式帳』に見える神宮祭祀の古伝に基づき、玉串を神拝の執物として用いるべきことを論じていた。その後、安政年間の『順考神事伝』や『すゞの玉籤』においても、玉串や櫛などの祭料について考証を巡らし、上代においては髻華や鬘に神霊が宿るものとされていたことから、玉串が祈願対象の神霊を宿すもので、その御稜威を表徴する「幣帛の料」として位置付けられていたことを考察していた。申請者は、是香の祭式書『神祭式』『祭奠式』の玉串行事の検討も踏まえ、是香が玉串行事を祝詞奏上と不可分の供進行事として位置付けるに至った経緯を跡付

けてゆく。

慶応四年三月、維新政府発足時における明治天皇の天神地祇誓祭は、是香の六男是愛がその草案を作成した。祭典では、天皇による玉串奉奠が行われた。天神地祇誓祭における玉串奉奠こそは、その後の天皇親祭祭祀の原型となるものであった。

明治四年十月の「四時祭典定則」は、元始祭をはじめとする天皇親祭祭祀の祭式次第に、玉串行事を組み込むものであったが、それは国家的・公的な幣帛とは自から区別されるものであった。同様に、官国幣社の祭祀においても、国家的・公的な幣帛とは別に、玉串は、斎主または奉幣使が奉る料として定められるに至ったのである。

以上の検討を承け、申請者は、明治八年、式部寮によって制定された「神社祭祀」の行事次第における「玉串ヲ奉リテ拝礼」条を巡って考察を展開する。ここにおいて「玉串奉奠」は、明確に「神社祭祀」に取り入れられ、近代の神社祭祀

に組み込まれてゆくことになった。申請者は、その過程を、仔細に跡付けてゆくのである。

併せて申請論文の第三の貢献として、幕末における修祓行事の実態と修祓観、維新以降における修祓行事の普及過程を具体的に明らかにしたことが挙げられよう。申請者は、維新以降、神祇官・神祇省の時期を経て、式部寮「神社祭式」において、修祓が官社祭祀全般へと及ぼされるに至る経緯についても、具体的に検証する。

このようにして本研究は、幕末国学における模索を経て、「玉串」と共に「修祓」が、明治以降の「神社祭式」に取り入れられるに至った経緯を明らかにした。この点もまた、本研究の少なからぬ貢献として評価できよう。

申請論文は、幕末維新期を通観し、その過程における祭式形成の展開を追跡する一つの試みである。従来、ともすれば式次第と作法のみに限られてきた祭式研究の刷新を目指す、まことに貴重なアプローチと言えよう。しかし本研究が、そ

うしたアプローチに伴う数々の問題点をも抱え込んでいることもまた指摘しなければならぬ。本書前半では、是香の神道思想に沈潜するあまり、なかなか本論のテーマたる祭式自体の検討に及んでいかない憾みがある。また申請論文の問題意識が、ともすれば祭式上の個別的・部分的な要因に限定され、近代日本の国家祭式全般を見通すような広がりには欠けている点も惜しまれる。もとより近代の祭式形成は、修祓や玉串の問題のみならず、勅使・供進使や祝詞・幣帛の国家性・公共性も含めた、よりトータルな観点からの検討が不可欠であろう。

しかしながら、近世・近代の過渡期における国学思想とその祭式構想を巡って、一貫した視点から再検討を試みた本研究の研究史的意義は決して少なくない。その研究成果は、神社祭式研究のみならず、明治前期の国家祭祀研究・儀礼文化研究にも数々の示唆を与えるものである。今後、本研究が、神社祭式研究における一里程碑として参照されていくことは確実である。よって本論文の提出者星野光樹は、博士（神道学）学位を授与するに足る学力を有しているものと認められ

る。

平成二十八年十月二十五日

主查	國學院大學教授	武田秀章	印
副查	國學院大學教授	西岡和彦	印
副查	國學院大學准教授	遠藤潤	印
副查	國學院大學教授	阪本是丸	印

星野 光樹 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士（神道学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十八年十月二十五日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	武田秀章	印
副査	國學院大學教授	西岡和彦	印
副査	國學院大學准教授	遠藤潤	印
副査	國學院大學教授	阪本是丸	印